

遺構を縫う

- 「窓を介した記憶と風景の日常化」 -

3月、気仙沼を訪れた時に私たちは、温度差のある「ちくはくな風景」を体験しました。

- 海を覆う、真っ白な防潮堤
- 草木が鬱蒼と生い茂る、野生化していく震災遺構
- デジタルサイネージがきらめく道の駅
- 崖上げされた土地へ住む地域の人々の日常

このような異なる空気感をさきやかに縫うことに、生きた記憶の宿る風景があると考えます。

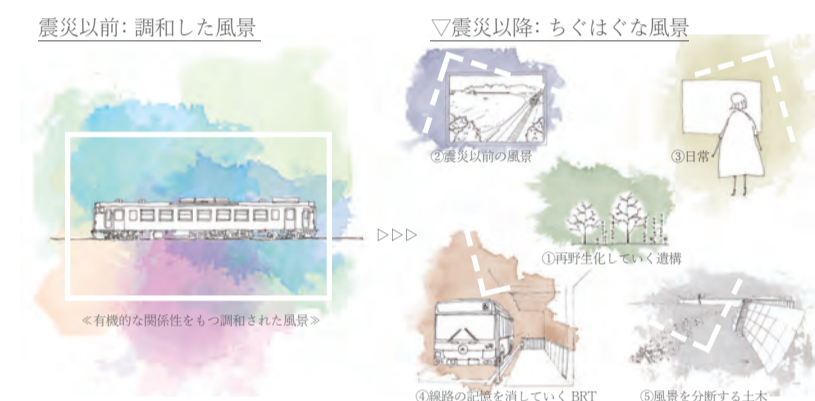
ちくはくな風景が混在する鉄道跡上に、プログラムをもつ6つの「小さな日常」をそと置き、

気仙沼線の車窓と重なる意を介して、日常へ取り留めて置き、風景を根差し、

震災の記憶と移り変わる風景を地域の日常へ優しく縫い合わせていくことを提案します。

記憶と風景を生かせる日常へ縫い合わせることで、震災以前の風景へ還ることを考えます。

1. 敷地調査 | ちくはくな風景



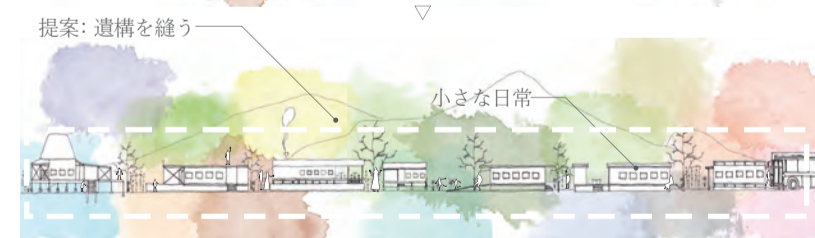
3月に気仙沼を訪れた時、温度差のあるちくはくな風景を体験した。再野生化していく遺構、記憶を消していくBRTや防潮堤、地域の日常などがパラメタに存在している状況である。このような異なる空気感をさきやかに繋いでいくことに、この先の記憶の宿る風景があると考える。

2. 気仙沼線 | 日常のある風景



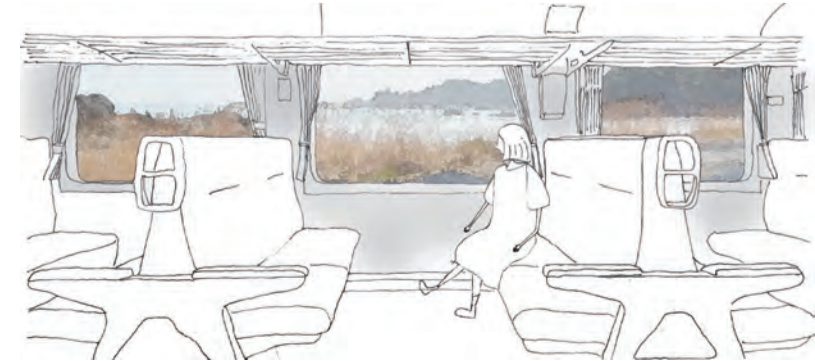
震災前は気仙沼線が走り、自然と土木が地元の人々の日常とさきやかに繋がっていた。車窓からは三陸の海が見え、日常の中で記憶の宿る心象風景として存在していた。記念碑のような冷凍保存された記憶ではなく、日常と風景が関わりを持つことで生まれる「弱い記憶」こそ価値があると考える。

3.1. 提案 | 遺構を縫う



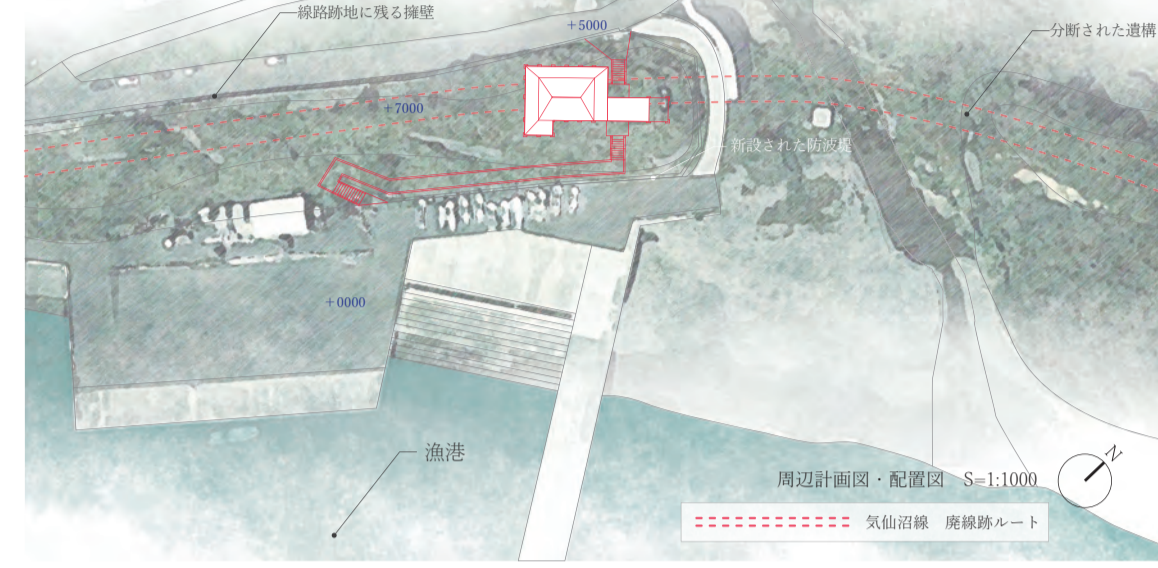
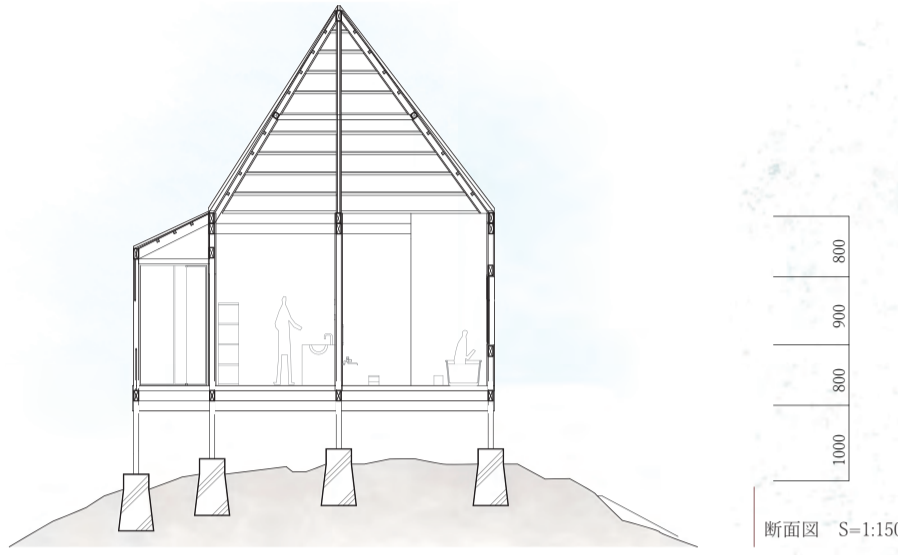
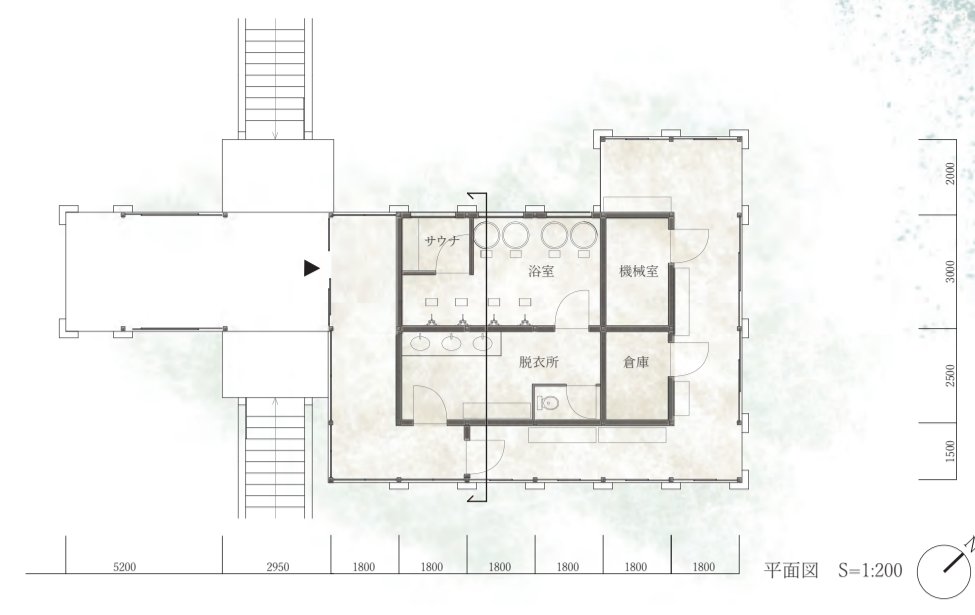
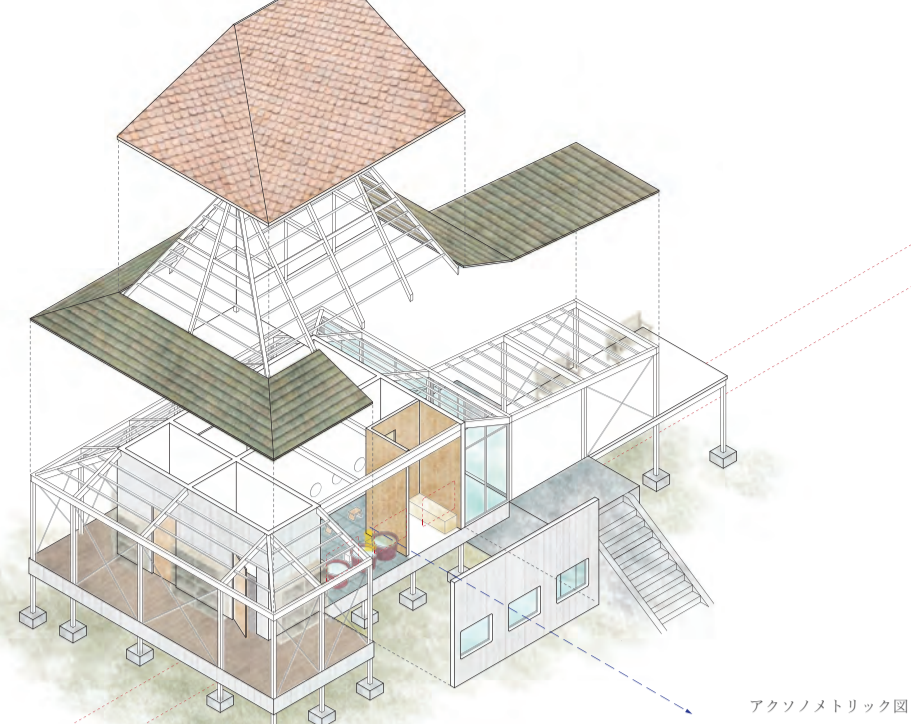
ちくはくな風景が混在する鉄道跡上に、プログラムをもつ6つの「小さな日常」をそと置くことで、異なる空気感を徐々に馴染らしていき、震災の記憶と移り変わる風景を地域の日常へ優しく縫い合わせていくことを提案する。

3.2. 手法 | 窓による眼差しのランドスケープ

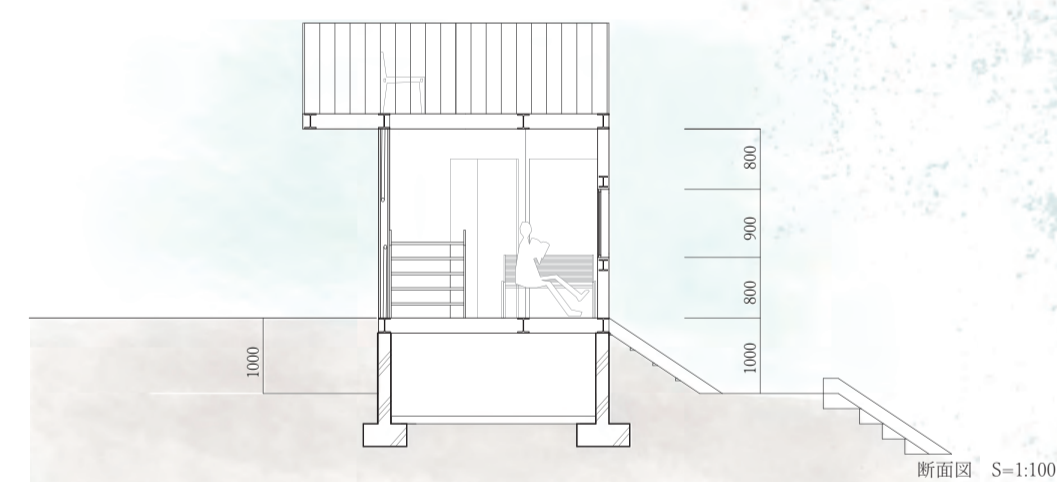
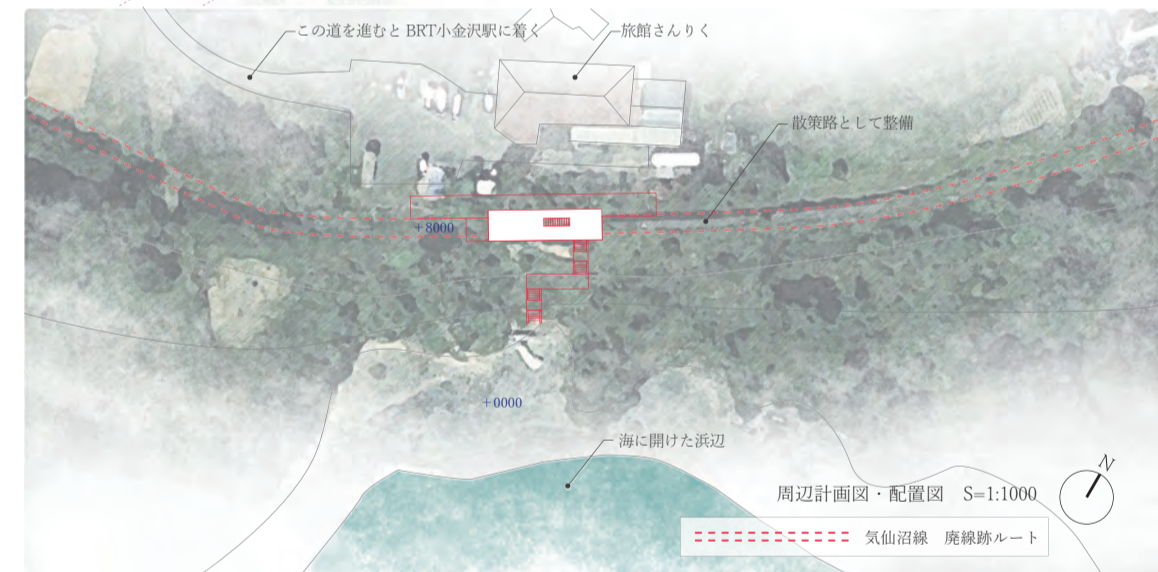
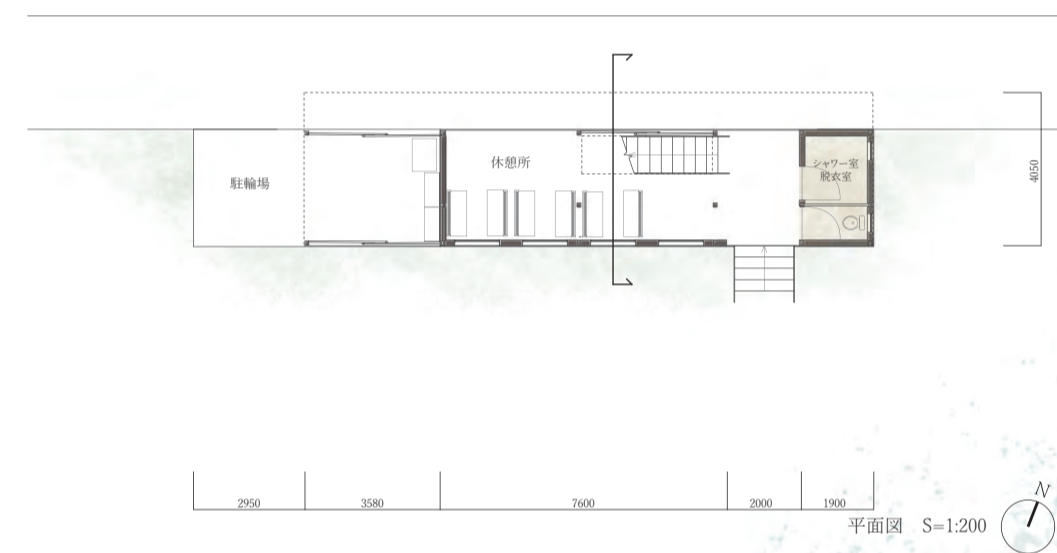
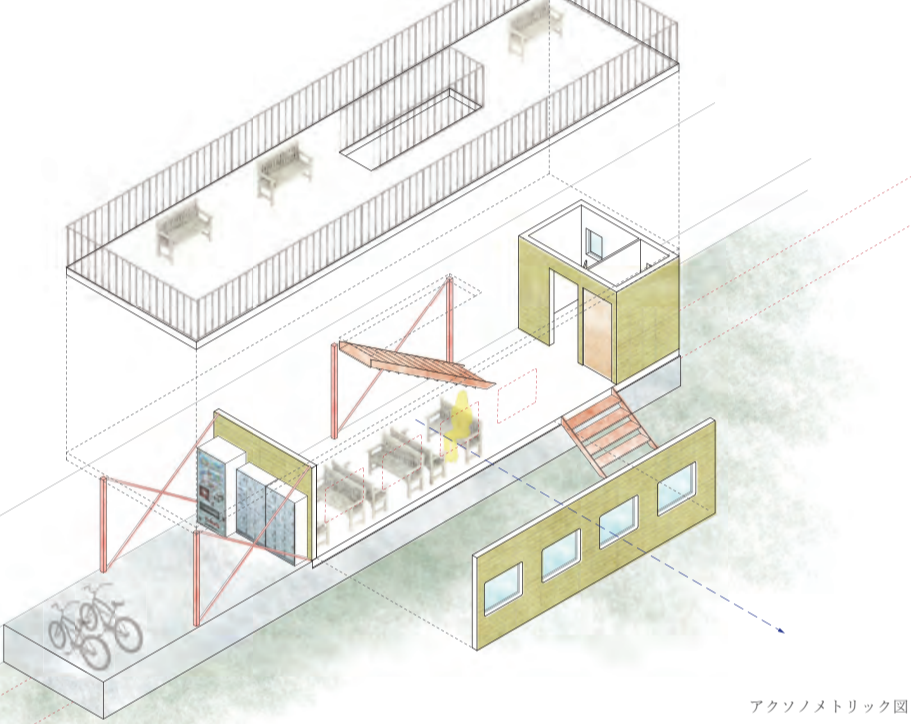


窓は風景を日常へ介入する手段であり、風景と向かい合うための眼差しのランドスケープである。失われていく風景を今を生きる日常にそと重ねるため、気仙沼の風景をフレームリングする意に着目した。気仙沼線の車窓と同じ高さと同スケールをもつ窓を配置し、移り変わる風景を野生化していく自然を日常へ取り留めておくことで、弱い記憶として還元されていく。

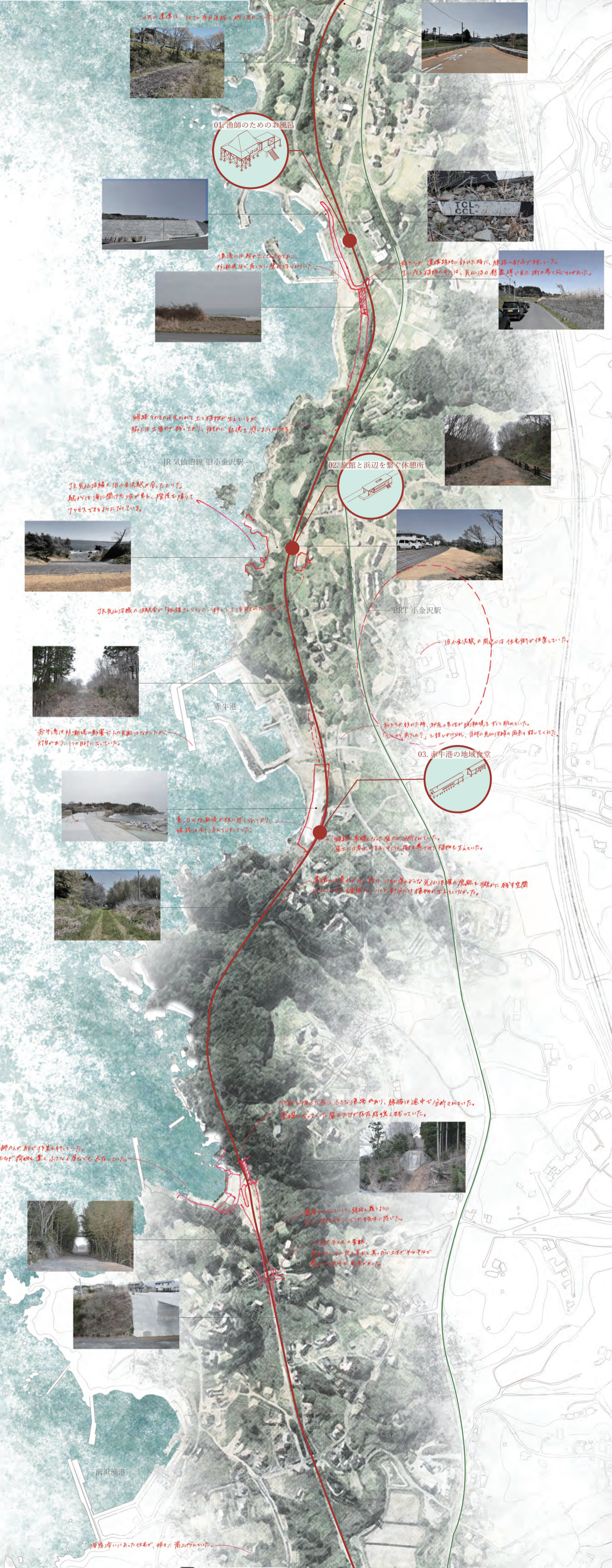
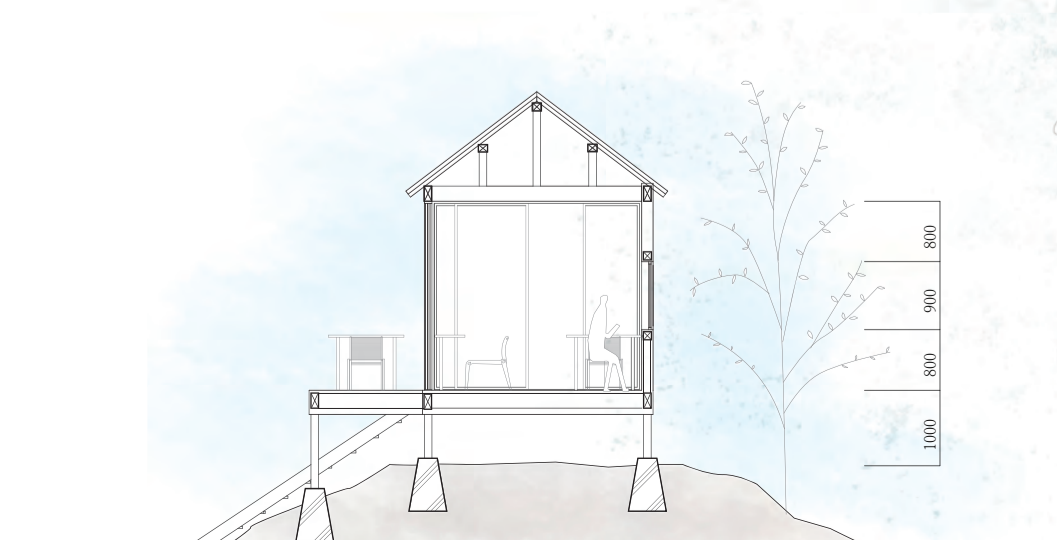
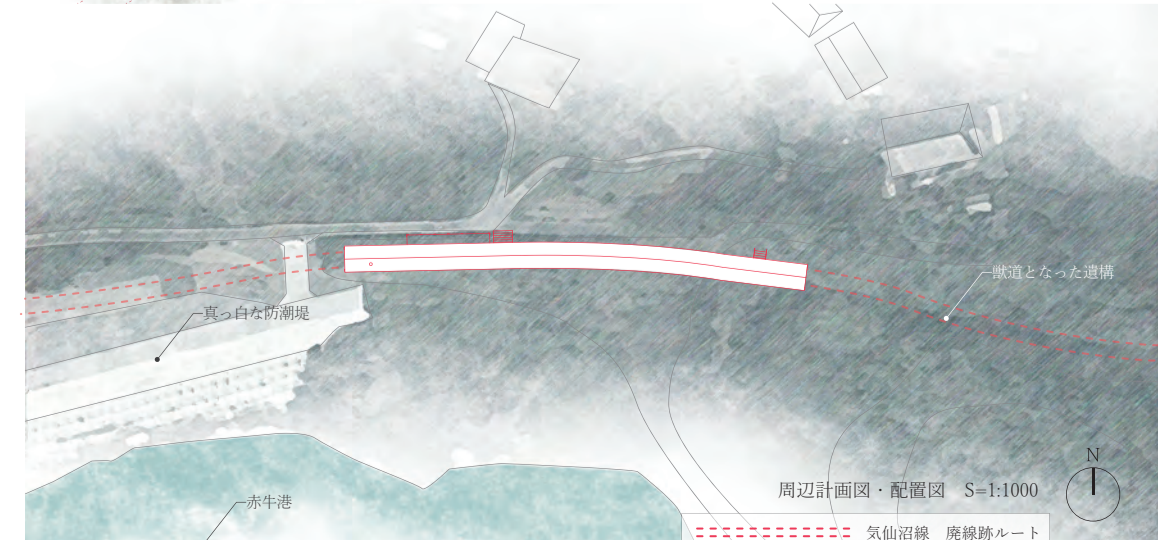
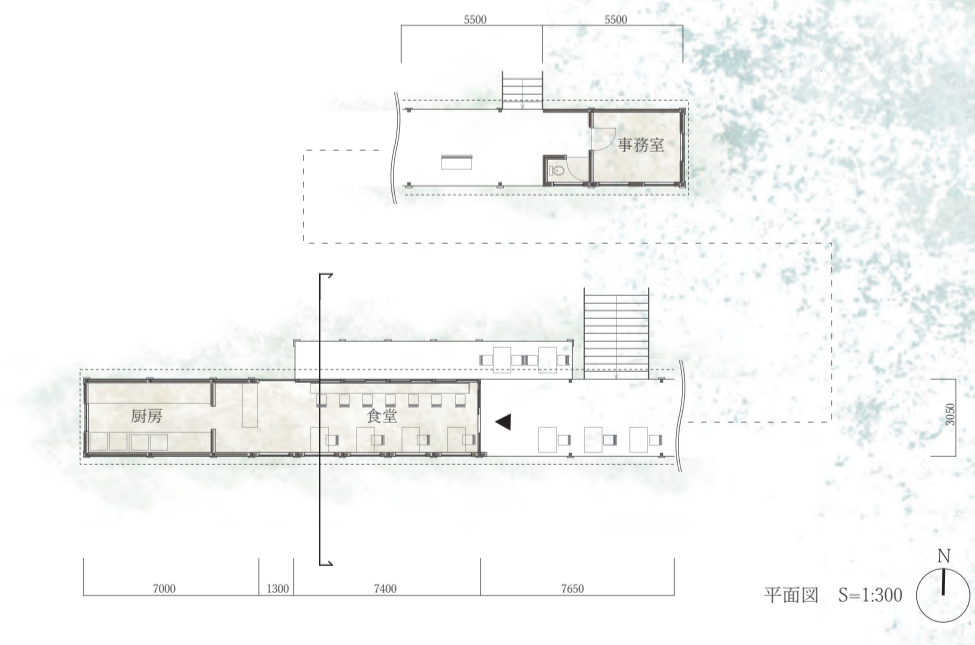
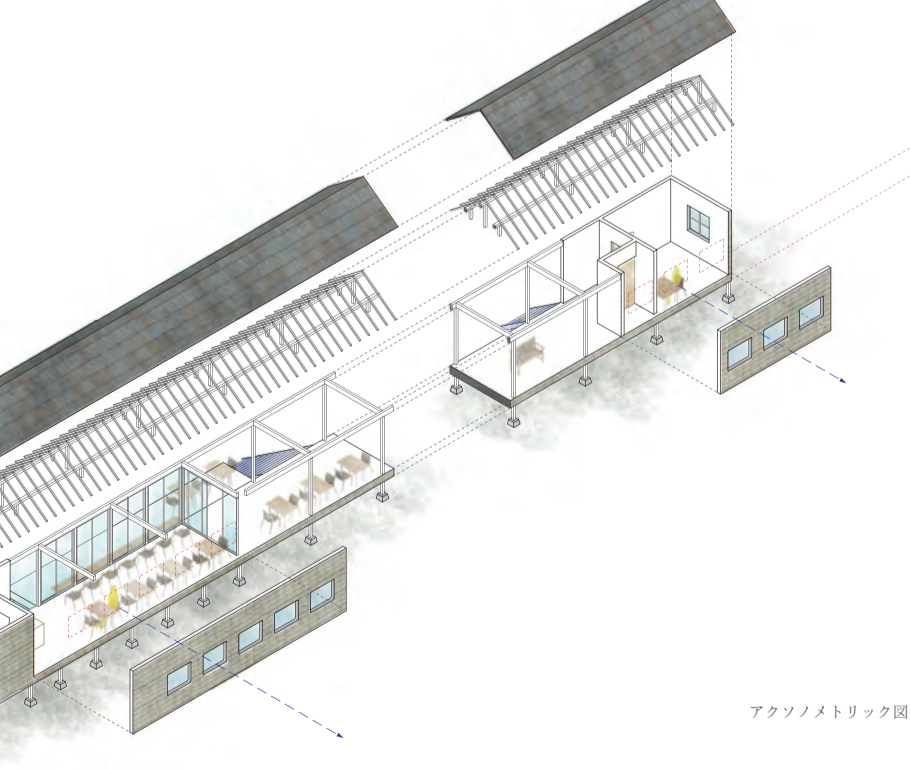
01. 漁師のためのお風呂：再野生化していく遺構と防潮堤が併存する小さな漁港に、地元漁師のためのお風呂を提案します。漁港に対して丘のような高低差をもつ線路遺構に建築を置き、防波堤を周るようにアクセスしていくことにより、漁港と防波堤と遺構の異なる空気感を緩やかに繋いでいきます。お風呂の窓から見える風景は気仙沼線の車窓の記憶と重なり、日常的な眼差しをもつ記憶の宿る風景へ移り変わっていきます。



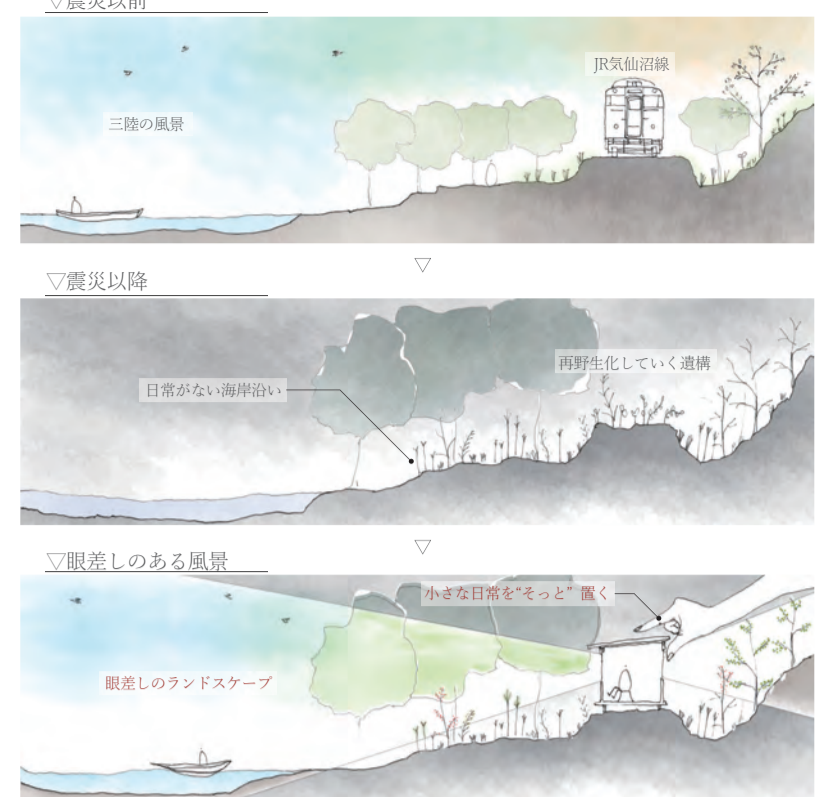
02. 旅館と浜辺を繋ぐ小金沢休憩所：旧小金沢の駅舎が一部活用されている旅館と海に開かれた浜辺のあいだに、2つを繋ぐ休憩所を提案します。海に開けた浜辺に見える線路遺構に建築を置き、内陸と海辺のアクティビティを日常を介して緩やかに繋いでいきます。休憩所に隣接する遺構は散策路となっており、海岸沿いの一つの拠点として、日常を緩やかに拡張していきます。



03. 赤牛港の地域食堂：風景を隔てる真っ白な防潮堤と獣道へ遷移した鉄道跡地に隣接する赤牛港に、地域食堂を提案します。野性的な自然の道から真っ白な土木の道へ変化する濃密なグラデーションをもっているこの土地に、細長い建築を配置することで、緩やかに居場所を作っていきます。三陸の海が一望できる港側の居場所と、動植物に囲まれた鉄道遺構側の優しい居場所が共存する風景を考えます。

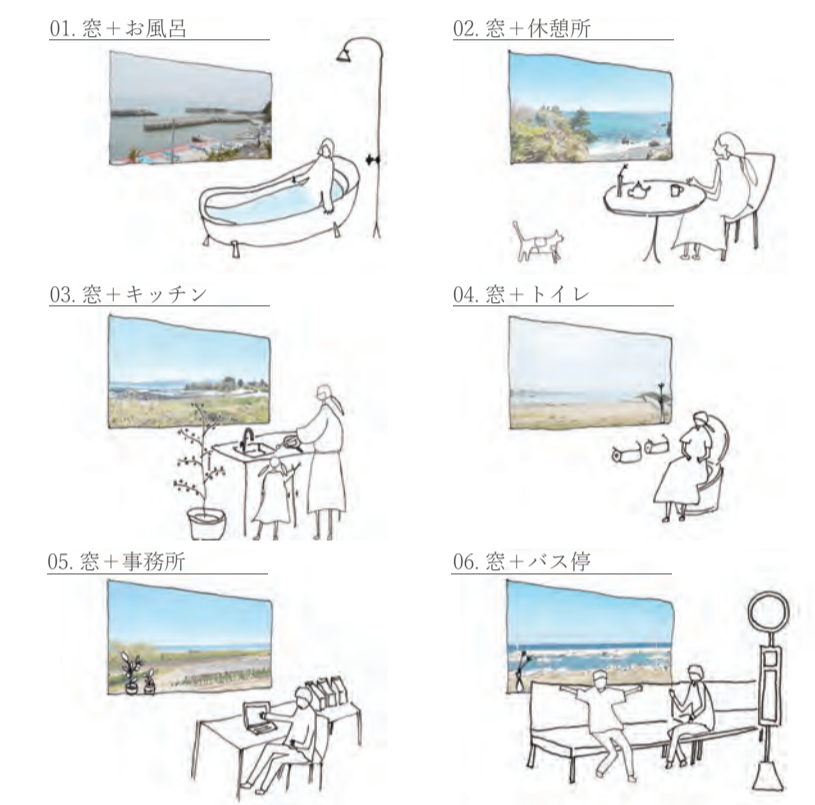


3.3. 眼差しのある風景



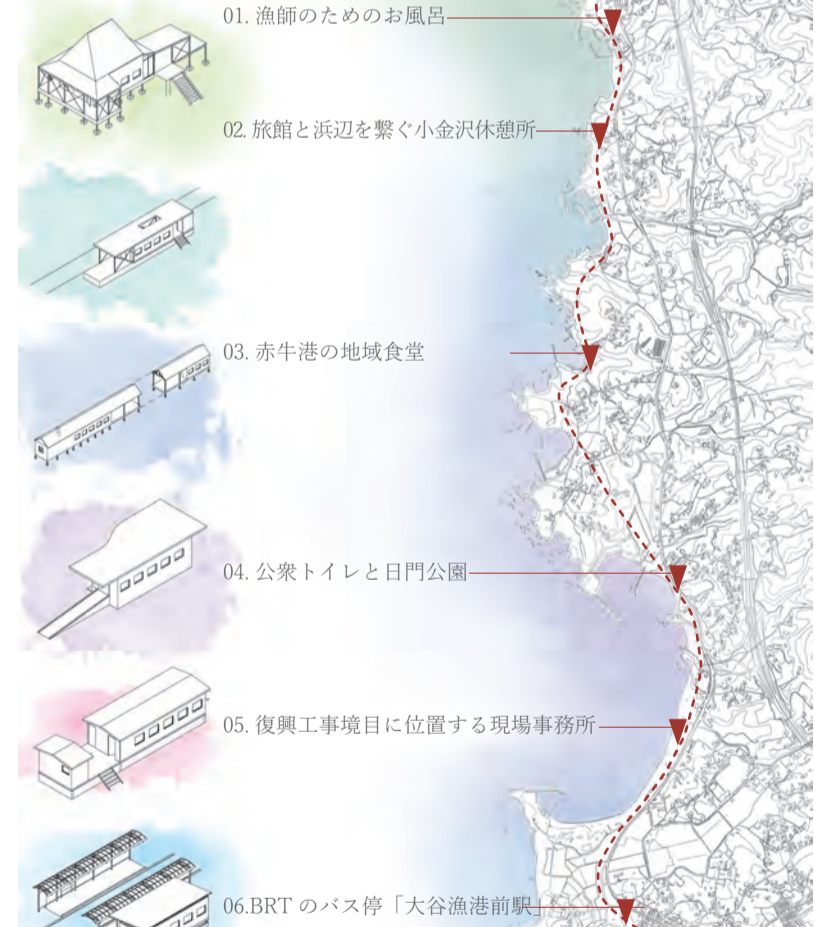
小さな日常を線路路上にそって置くことは、気仙沼の風景に眼差しをつくることである。日常的な窓を介し、震災以前の風景と以降の風景を重ね合わせることで、弱い記憶の宿る風景を提案する。

3.4. 風景と遺構を小さな日常へ介入していく



気仙沼線の記憶をもつ窓を小さな日常にそって重ねる。日常の背景となることもあれば、ふとした瞬間に風景と向き合うこともある日常を風景と繋ぎ、過去の記憶とも繋ぐことを目的とする。

3.5. 全体計画 | 6つの小さな日常



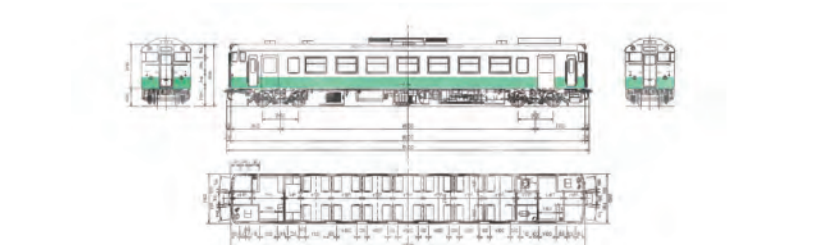
全体計画として、本吉町から大谷海岸にかけての旧 JR 気仙沼線の線路上に6つの小さな日常をもつ建築を配置していく。「漁師のお風呂」や「BRTのバス停」など敷地周辺との物語性をよまえるプログラムを決め、きまやかに人の日常的な居場所を計画していく。防潮堤や再生化していく遺構と近すぎず遠すぎない関係性を目指していく。

3.6. 気仙沼の日常に馴染む建築



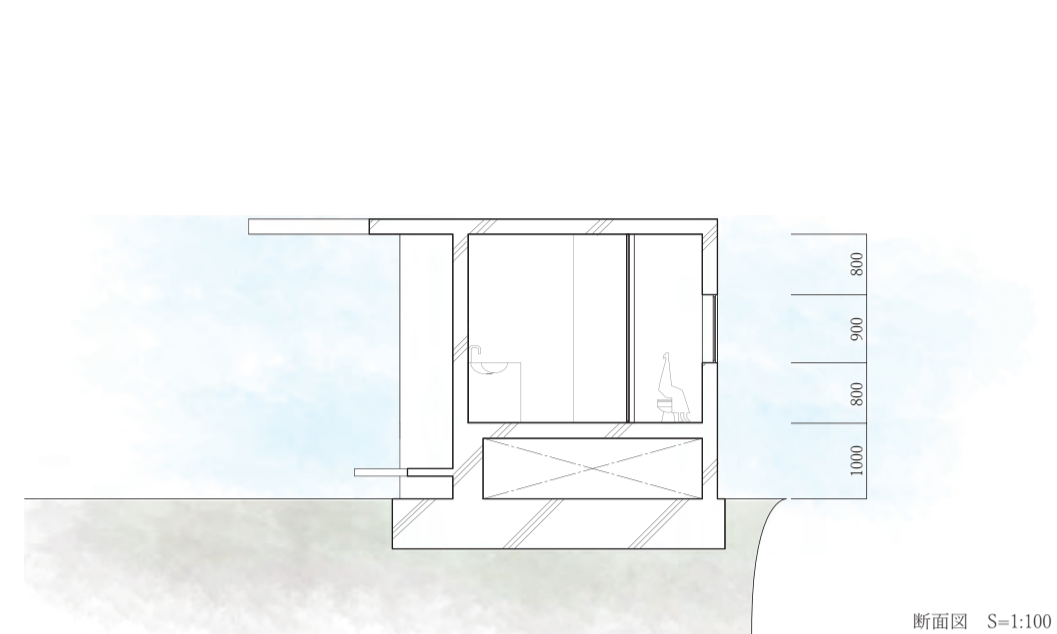
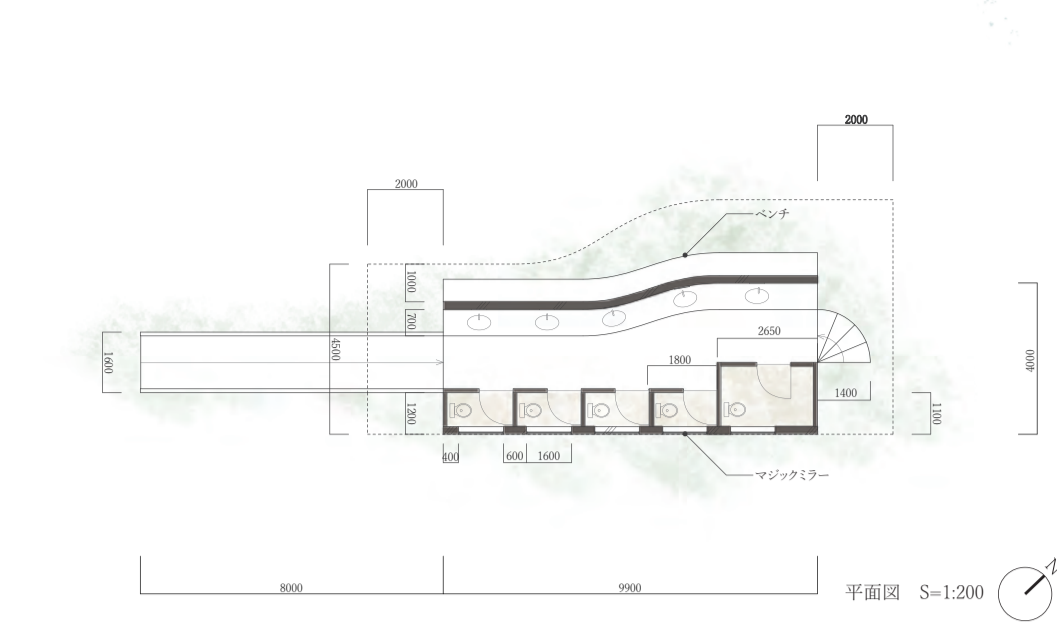
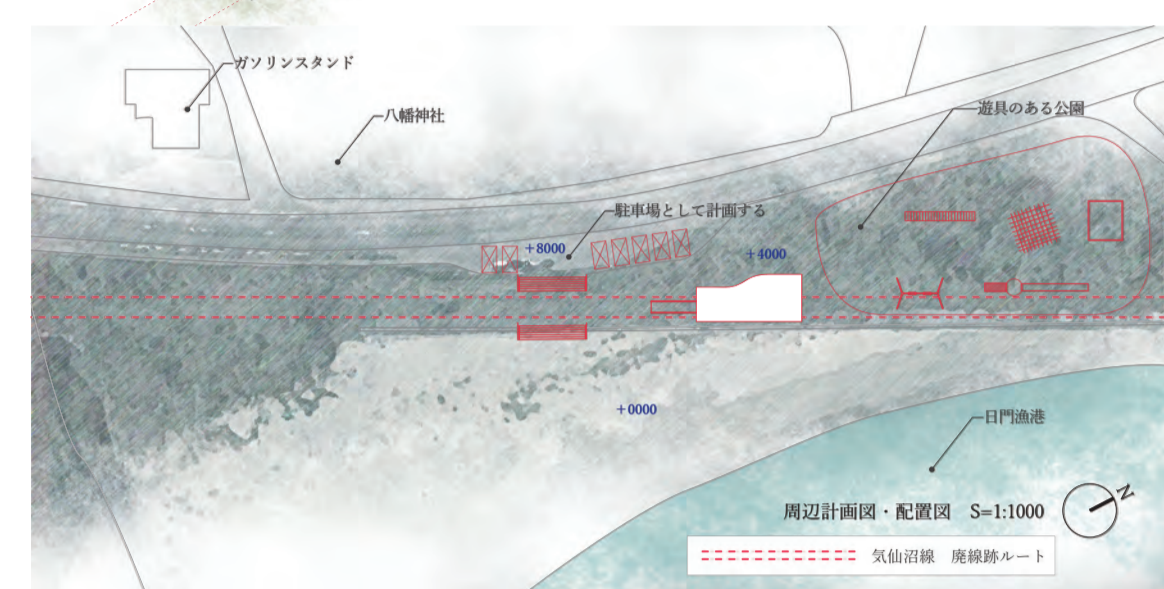
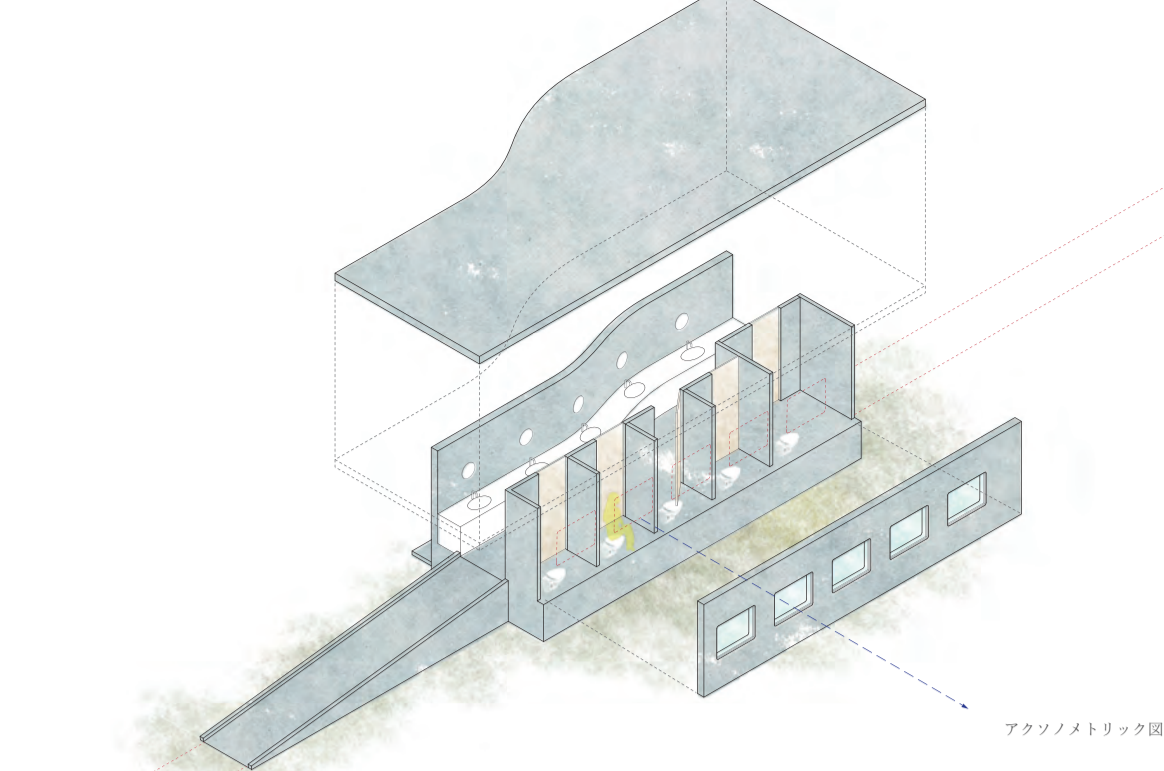
建築は歴史的なデザインをするのではなく、気仙沼に実用建っている建築と同じ温度をもつことを意識し、設計していく。

3.7. 気仙沼線のスケールを投影すること

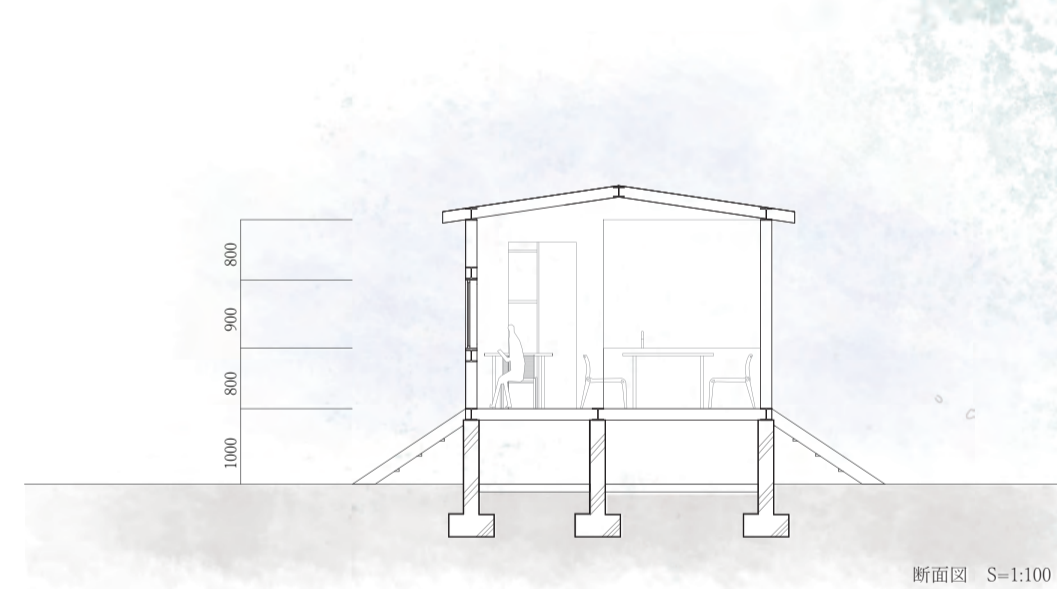
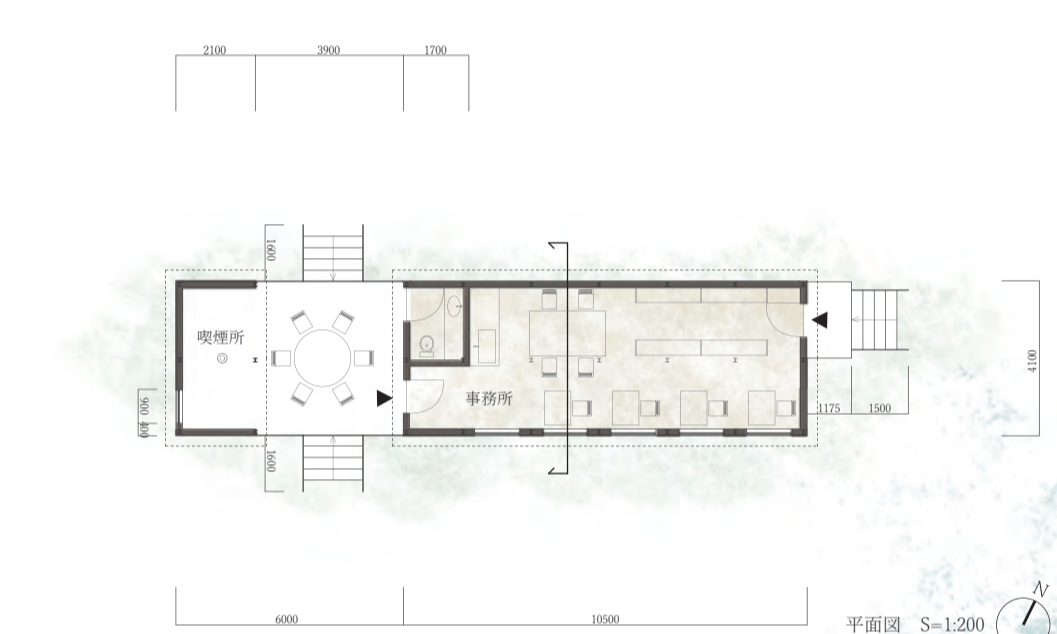
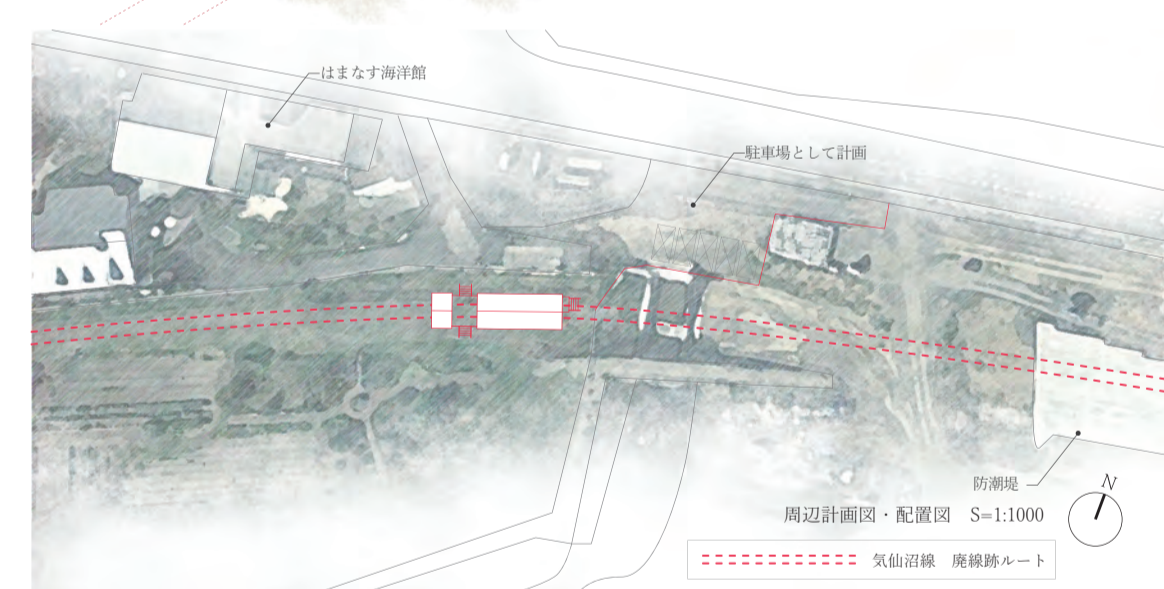
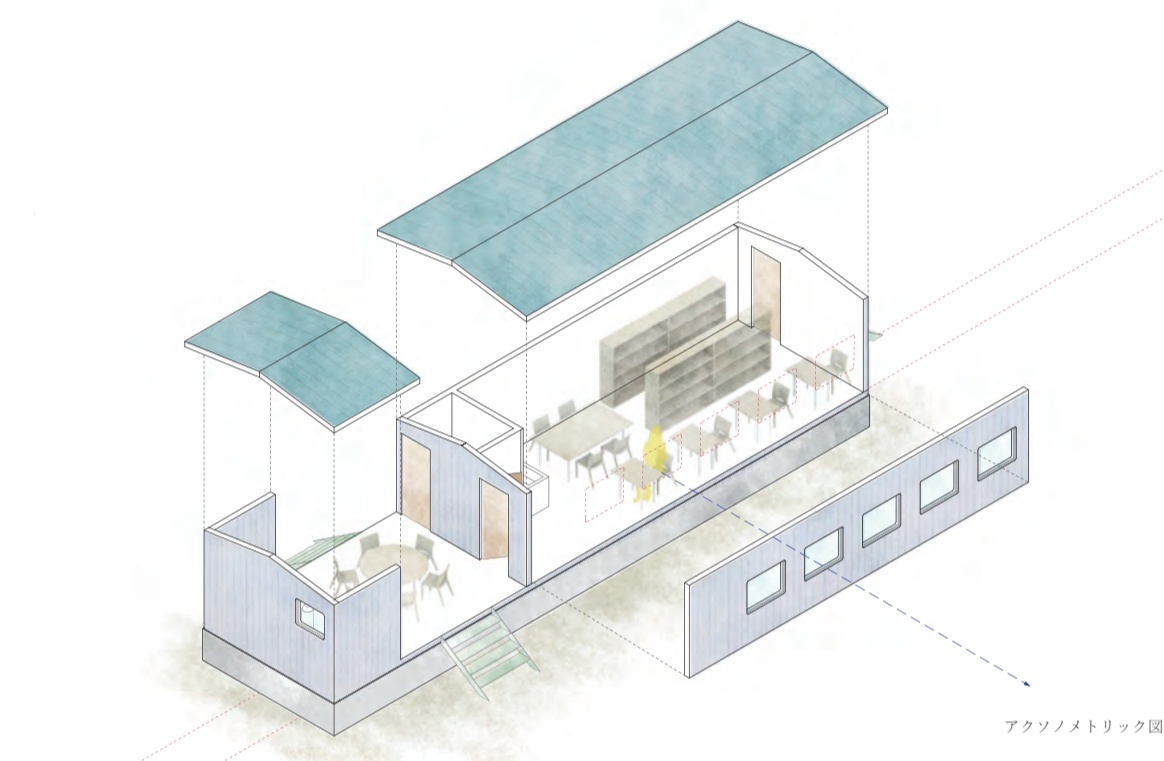


JR 気仙沼線のスケールを建築へ投影し、震災以前の記憶を小さな日常へオーバーラップしていくことにより、記憶が重層的に積み重なる体験となる。

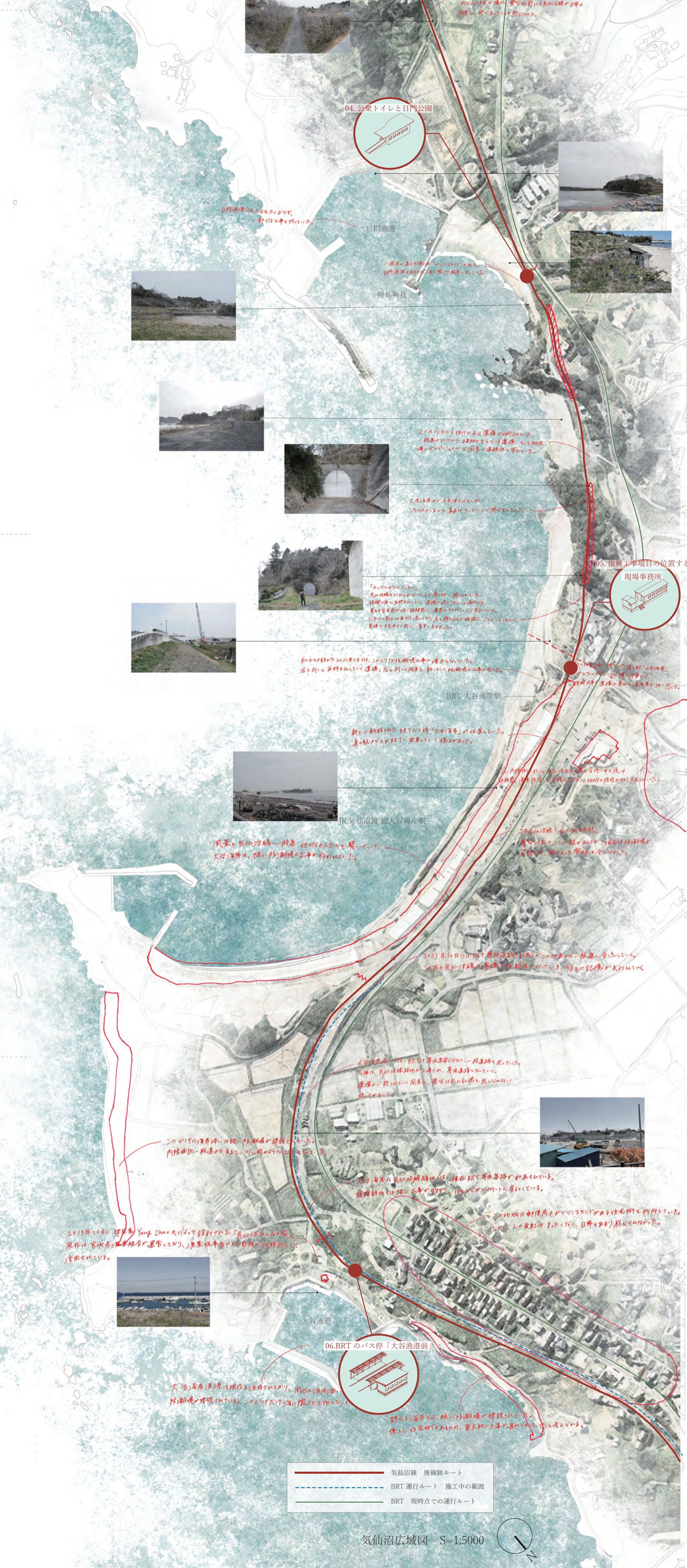
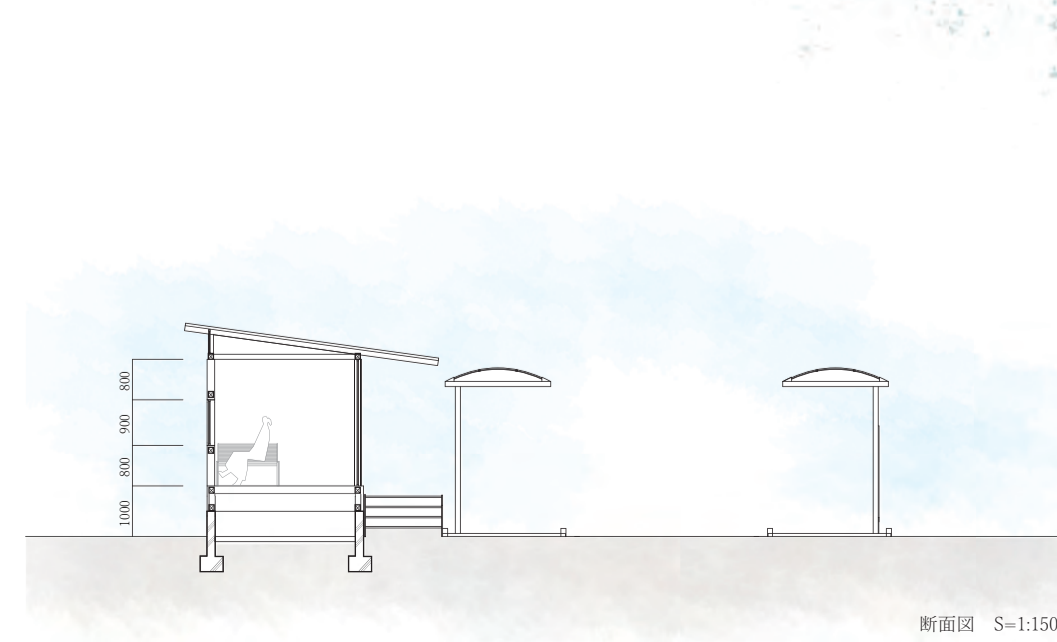
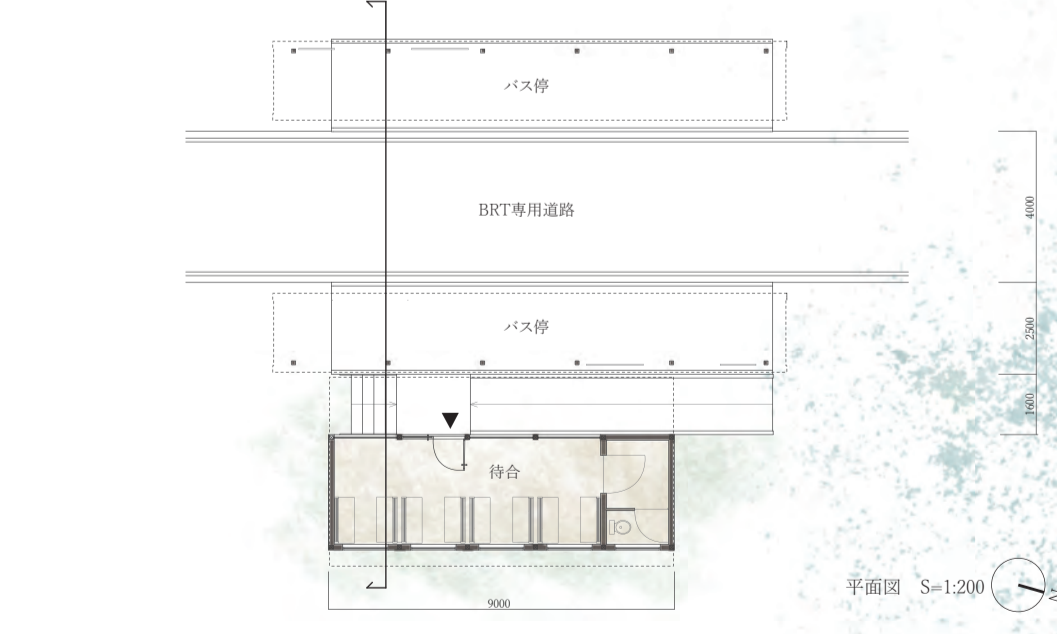
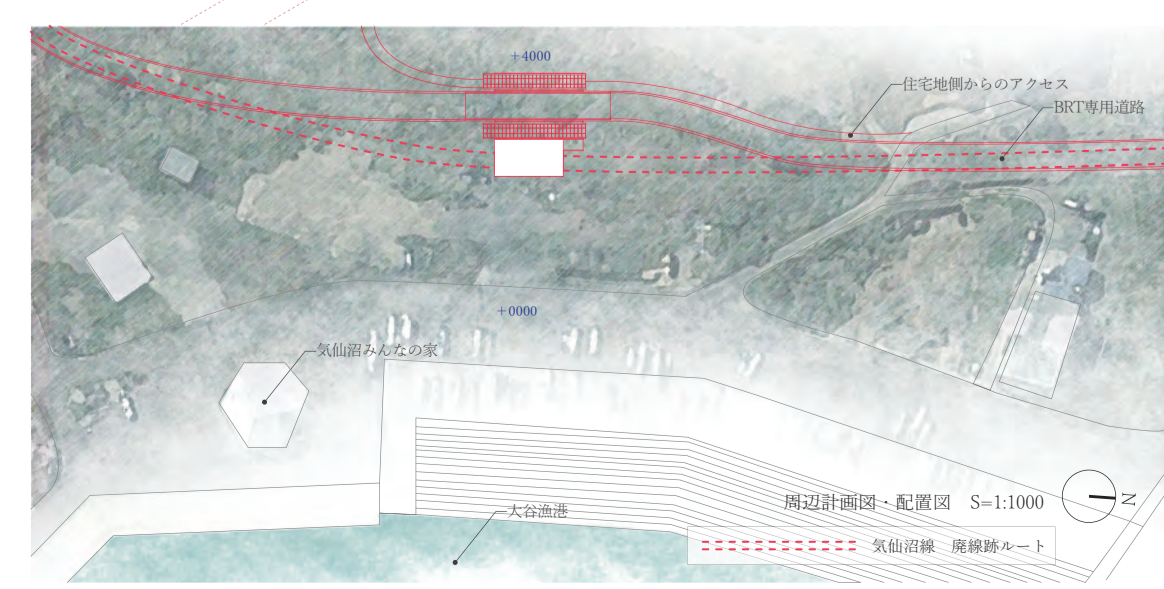
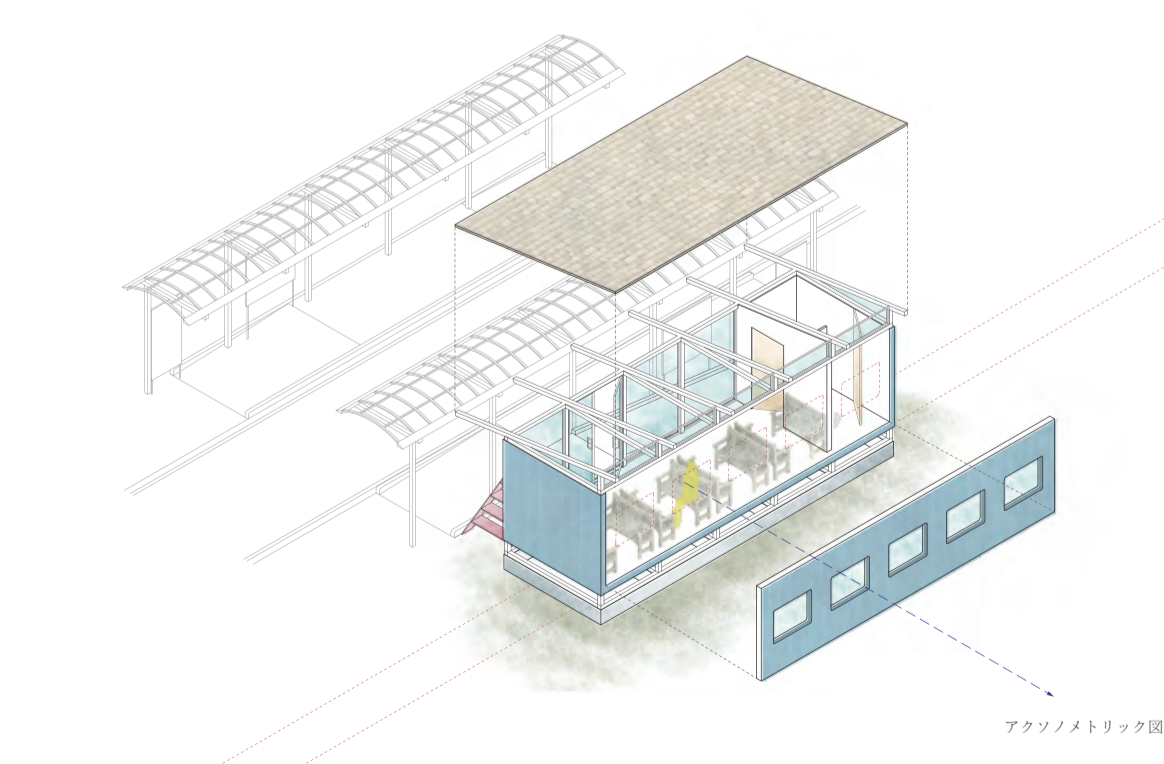
04. 公衆トイレと日門公園：内陸側と風景が連続する海に開けた漁港と、分断された遺構が残る浜辺に公衆トイレと公園を提案します。敷地周辺には一般道に隣接するガソリンスタンドがあり、また大谷小学校・中学校の通学路としての役割を持っています。海に開けているため草木の生えた遺構周辺は明るく、遊具のある公園と公衆トイレを置くことでただ通りすぎず、ふと立ち止る居場所として計画していきます。



05. 復興工事項目に位置する現場事務所：防潮堤の復興工事と遺構が再生化していく光景が隣接する敷地に工事現場事務所を提案します。異なる空気感の境目の遺構側に現場事務所を配置し、作業当事者の人々をその境界線を日常的に跨がせることによって、緩やかに繋げていきます。喫煙所側からは真っ白なコンクリートによって閉ざされたトンネルの風景が見え、日常の一部として変化していきます。



06. BRTのバス停「大谷漁港前駅」：現在BRT専用道路の工事を行っている海に開けた遺構跡地に、BRTのバス停を提案します。JR気仙沼線跡地がBRT専用道路へ移り変わっていく中で、記憶の重なる居場所としてバス停を計画し、海に開けた大谷漁港と繋がる日常を考えます。バスを待つ何気ない時間が震災以前の風景と重なり、記憶の宿る風景が日常の中へ溶け込んでいきます。



気仙沼広域図 S=1:5000